

24OP11-5

小児がん療養中の学校に通う子供を支える家族への関り（インタビューにより家族の思いや考えの現状を把握する）

吉原 一則、瀧田 真佐江

埼玉県立小児医療センター

【はじめに】

当センターでは教育継続目的で養護学校が併設されている。養護学校に在籍し、登校許可も出ているが、登校出来ない児がいた。家族は登校していない児の姿を見てもそのことに大きな不安としてとらえていなかった。一方医療者は子どもの教育に対し、成長発達を促進していく上でなくてはならないものであり、病気の子ども達により良い環境で、教育を受けられるようにする必要があると考えている。そのことにより医療者と家族の考えとで温度差が生じていた。その温度差を軽減する為に子ども達を支えている家族が教育についてのどのような思いや考えを抱いているのか現状を把握することが必要であると感じた。親の考えや思いを知る事で、家族看護を行っていく上での示唆を得たので報告する。

【I. 研究の目的】

養護学校に通う子どもを支える家族が抱く気持ち、今後の将来に対する不安や期待を知ることで、医療者と家族の温度差を軽減し家族の気持ちをふまえた援助が提供出来る。

【II. 研究方法】

1. 対象：当病棟長期入院中の血液腫瘍科患者の家族9名
2. データ収集期間：平成18年7月3日～7月28日
3. 調査方法：質問紙でのインタビュー調査
4. 倫理的配慮：家族に研究の目的を説明。データは研究以外の目的では使用しないこと、終了後破棄すること、実名、個人名が出ないことを保証することを約束する。

【III. 結果】

1. 同級生が退院することで落ち込む子どもを支えている親が多い。
2. 勉強の遅れを心配している家族が多かったが、実際は遅れてはなかった。
3. 登校したくない時期はあるがなにかのきっかけで学校が楽しみになった子どもがいた。
4. 入院中、学校に行けることに対して積極的であった家族がほとんどだった。
5. 教育方法が少人数制であった。

良い点：細かな所まで配慮してくれる。

悪い点：他児との交流が少ない。

【IV. 考察】

学校での生活に対して、養護学校で多くのことを学び、その中で喜び、寂しさなどを感じていた。子どもは同級生が退院することで寂しくなり、そのことで浮き沈みする子どもの感情を支え、登校するまで見守る家族がいることを知った。医療者はそのような背景があることを知り、家族と寄り添った看護を行っていかなければならないと考えられる。

24OP12-1

口内炎による痛みを体験した患児の母親への支援の検討

新井 香織、今井 裕子、阿部 清子

群馬大学 附属病院 北3階病棟

【はじめに】化学療法の代表的な副作用のひとつに口内炎がある。口内炎は悪化すると痛みを伴い、食事や会話することさえままならなくなるため、口内炎を予防し、早期に改善するためには十分な口腔ケアが必要となる。しかし、学童前期以前の患児は、本人によるセルフケアには限界があり、患児の年齢が低いほど家族によるケア協力が不可欠であるため、家族にも口腔ケアの必要性を理解してもらうことが必要となる。今回化学療法を開始後に口内炎を生じ、強い痛みを体験した患児の母親への支援を検討した。

【事例紹介】6歳、女兒、急性リンパ性白血病

入院4日目から寛解導入療法が開始となる。開始後36日目より口内炎出現し、以後激しい痛みを伴い、泣き叫んだり眠れないこともあり、ペンタジンを用いて鎮痛を図ることもあった。1週間程で痛みは落ち着き、その後寛解導入療法は終了した。入院初期であったため、母親は患児の様子をみては一緒に泣いていたり精神的にも不安定な様子がかげえた。この時のエピソードは患児とそばで付き添う母親に強烈な印象を与え、母親からは「2度とこんなつらい思いをさせたくないし、したくない」という訴えが聞かれた。そのため早期強化療法が開始となる際には、口内炎ができることや予防として歯みがきや含嗽をして口腔内を清潔に保つ必要があることなどを説明した。母親は口内炎を予防したいという思いは強く、いろいろと質問等していた。そこで母親からの訴えは丁寧に聞き、母親が抱えている気持ちを共感したりすることで不安を表出しやすい雰囲気を作るとともに、患児の現在の状況や痛みをアセスメントし、苦痛を緩和する方法を考え、家族が必要な情報を提供していくことを行った。早期強化療法でも口内炎は生じ、痛みを伴うこともあったが、母親も少し落ち着いて対応でき、看護師が気づく前に、患児の様子や口内の変化を敏感に感じ取り、さらにそのことを医療者に話をする事ができていた。本研究および演題発表に関しては、患児の母親より同意を得た。

【考察】患児に付き添う家族は患児の重要な情報を得ていることも多く、患児と医療者との橋渡的存在である。口腔ケアの必要性を母親が理解することができれば患児にもその必要性を働きかけることができる。さらに医療者とともに患児にとって最良な方法を共に考え、母親がスムーズにケア参加できるよう支援していくことが重要である。